

題字 滬名一雄

定価 1部 100円

秋・冬のロツエ、エベレストに登頂し、グウラギリ北壁のベールートにも参加している村上和也、エベレストの経験もありマツキンリー撮影にも同行している山学同志会の木本哲、カメラマンの阿久津悦雄である。

五月、十数人に及ぶ隊貨を梱包船出しを済ませ、宮崎他の先発隊は八月初旬にカトマンズ入りをする。今だに到着しない隊貨に振り回されながらも解決し、八月中旬

一人がそのケープルから転落、行方不明になった、というニュースも伝わる。これは登山隊員だけが承知して、映画スタッフ達には伏せておいた。登山を知らない人達にいたずらに不安を与えてもいけないからだ。

私達の登山許可については、とうとう正式には出ない。しかし、観光省登山局長のP・M・シュレスタ氏の大英断により、「貴隊はインド隊の指示により、行動をする

られ、がく然とする。雨に濡れ、つるつる滑る山道である。いくら「ヒマヤヤへ行く」と云つても初日の第一歩からこれ程のことはあるまい、とたかをくくっていた彼等である。しかも道はエベレスト「街道」と聞いていた。もつと大きく、楽々と想像していたのである。ヒマヤヤ経験者、特に雨期のキャバパンを知っている人はともかく、全くの素人集団であるから無理もない。道は川となり、水牛など動物のフンの混った泥水が流れる。初日の宿泊地に着いても雨が降り続く。冷たい雨と汗に濡れ口々に嘆くが、この初日に痛めつけられたことが、この先への覚悟を固めさせてくれたらしい。

いくつもの山や谷を越え、同じ道を歩いて帰ることを思うと、もう引き返せない。脱走し、皆から離れたら大変なことになるという不安感、嫌が応でも進むしかない。嫌が応にも「自分の身体と足だけが頼り」とあきらめともつかない覚悟が出来上らざるを得なかった。

白いヒマヤヤの山でも見ればまだ慰めにもなるが、雨の中は進ばない。だが、もつと恐怖なのはヒルの襲撃である。歩けば靴に付き、両側の木や草から身体に飛びつく。知らずにいれば靴下の中、ズボンの中、シャツの中まで入り込む。しかも雨で気分の重い日にその恐怖が多い。ある日、役者の伊藤敏八さんは用を足すべくズボンを下ろした。すると白いパンツの前が真っ赤になっているの

に気付く。ハッとしてパンツを下げてみると一匹のヒルが死んでいる。伊藤さんは大事な一物の先端をヒルに食われ、血を吸って丸々と太ったヒルは逃げ出すことも出来ずに押しつぶされ、大往生を遂げていた。彼はボラロイド・カメラで自らのモノを撮影し、ネパールの記念として持ち帰った。だんだんとキャバパンにもなれて来た役者スタッフは道中の茶店に寄り、お茶や酒を飲むようになり、キャンプ地に着けば早速村中に繰り出し、茶店や民家に寄り込み、卵焼を頼み、ロキシーを飲む辛いと思うよりは楽しんだ方が得である。土地・土地の人達とも仲良しになれば心も身体も楽になり楽しい思い出も作れる。

私達にとって、映画界の人達との生活は初めての経験である。他の世界に住む人達の話は興味深く新鮮である。役者さん達の話も面白い。テレビや映画で見ただけの女優さん他の名前もたくさん出る。特に西田さんの話は最高。福島まよりの彼独特の話し振りで共演した女優さんの話や、有名税的にヤクザにからまれた話などなど。西田さんの周りには笑いの輪が出来、高度障害の苦しさやその日の疲れを忘れさせてくれる。回りにも気を配り、こんなところにも、人気者になる人の秘密、秘訣を見る思いがした。

アラスカ、北極ロケで五、エベレストで七、やせた西田さんは真黒に日焼けし、別人のように精悍になった。B.Cで最後の撮影を

終えた日、アラスカ、北極、エベレストと続いた苦労の日々を思い出したスタッフ達は涙を流し、B.Cへ戻って来た主役の西田さんは拍手に迎えられ、記念の文字を書き入れたビッケル、カラビナ、ハケンが監督から送られた。彼の目にも涙が浮び、おれの言葉も声にならなかった。B.Cを離れて一週間帰国した三十余人の役者、スタッフは帰朝報告会の席上、助監督一人を除く全員が「二度とヒマヤヤへは行きたくない」と語ったという。しかし、二、三ヶ月後の忘年会時の思い出話や今頃だく手紙には「とてもなつかしい。一生忘れられない経験。もう一度行ってみたい」に変わっている。私自身は当然、こころなるはずであるとは思っていたが。



本格的撮影はシルパ族の故郷ナムチエ・バザールの上の村クムジェンから始まった。連日の雨で撮影は思うようには進まない。植村さんとシルパとの再会、シルパ・ダンス、雪山をバックにトレーニングのシーンなど。

シルパダンスも昼間の撮影であり、酒が入らなくては調子が出ない。私は踊りの始まる前、踊りの合間に集まったダンサー（？）にチャンをすすめる役で協力をする。もちろんついでに御相伴にあがり、一緒に飲みながら雨の降る中で頑張ってもらう。国立公園であり、緑の保護の叫ばれている現在、マキを集めるのにも許可が必要であり、量も少ない。滞在をいしと云う。止むを得ない。

条件内である以外にない。クムジェンから連れて来たエキストラ役のおおさん達やキッチン道具のポーター達を数百メートルにわたって配置し、それらしい大部隊のキャバパン風景を撮る。大きくそびえて見えていたエベレスト、ロッキエに雲がかかってくる。急がなくて完全に雲にかくれてしまふ。ヤクの動き、集まる具合、並び具合に合わせ「用意、スタート」とトランシーバーで号令をかけて動かす。それを何度か何度もやり直すのであるから大変である。次いでB.C入り直前に高所順応訓練を兼ねてゴジュンバ・カンの登山シーンをボカルデ・ピークで

行方。高度は五千七百八十メートル。まだ高さに馴れていない人達にとっては大変な苦しみに伴う。雨期はまああけず、天候も悪い。約五四〇〇の地点にテント、食糧、撮影器材、酸素まで荷上げして、コック、キッチンボーイが入った泊り込みである。

初日、雲が多くヒマヤヤの大景観を入れての撮影が出来ない。それでも午後遅くまで雪の降る中でジッと待ち続ける。翌朝、また天候が悪い。雪が積もり、霧がたちこめている。とにかく現場へ、と登り始めると霧があがって来る。早く着かないとまたチャンスは逸してしまふ。肝心の西田さんが最後に登っている。この際、酸素を吸わせてでも早く登らせよう。登山隊員に酸素ボンベを背負わせ、西田さんに酸素を吸わせて狼回ししては戦争には勝てない。確かに人毎三分の酸素を八割に増やす。とたんに西田さんの足が早くなった。私はついて行けなくなったが主役役は早く到着、どうやら間に合った。ところが、昨日現場に置き、放しにしておいたカメラ（もろろん断熱ケースに入れてあった）は天気が良くなるとレンズの中側が曇ってしまった。撮影不能。折角の撮影チャンスがまた待ち時間になり、イライラさせられる。曇ったレンズを暖めたり、昨日追いついた山田が下から外のレンズを持って駆け登ったりして、何とか撮影を終了させる。大事をとり、ゴラクシェップに泊まり、翌日先発隊が受け入れ態勢と一九七〇年

ル人ドクターも忙がし各サント
を過っている。エベレストでの機
影は植村さんが登頂した一九六五
年のゴジュンバ・カンと一九七〇
年のエベレスト登頂時の二つであ
る。装備、衣類も当時と現在では
かなり違い、進歩している。時代
考証が必要であり、綿やビロン
の突つくり式ヤッケやオーバース
ボン、編み上げ式オーバースー
ズ、テントなども用意しての撮影
である。

一日のうちに良い天気の時、
悪い天気の時を撮ったりする。
ヒマラヤの天気が思ふようになる
訳もない。天気が良すぎるから、
下から雲の来るのを待つと、など
と信じられないことを監督が云い
出す始末。照り返しの炎熱地獄
の中でたまたたきつら待つ。そんな
時に限って下方から湧いた雲も途
中で消えたり、うまい位置には来
てくれない。先日は天気が悪く、
雪の降る中でこえながら晴れる
のをジッと待ったと云うのに、
時には陽が射し始める前に撮影
したい、という。三時に起き、お
茶だけ飲んで出発してヘッドラン
プをつけてアイスフォール内の現
場に向う。朝食、昼食はB・Cから
シルバ達が届け、撮影の合ひ
間を見てとる。熱いコーヒー、紅
茶、緑茶、スープ、みそ汁などを
御飯やおにぎりと一緒に保温ジャ
ー、ポットに入れ、五人分以上
を運ぶ。撮影隊は二週間程の滞在
で全予定シーンを撮り終えB・Cを
離れる。一人の脱落者もなくB・C
へ入り、撮影を済ませて無事下山

した。私達登山班の役目はこれだ
けど一〇〇%果たしたと云えなく
もない。私達がもし登頂し、頂上
からの撮影に成功すれば二〇〇%
の成功になる、と私は考えていた。
残るは九登山隊員とカメラマン二
名の十一名のみ。我々にとつての
本番の始まりである。

撮影の終盤から荷上げを併行し
て進めており、撮影隊がB・Cを
離れた十月三日にC・2(六四五
〇)を建設。インド隊は明日に
も先ず東南麓ルートから第一次隊
を登頂させる、と伝えて来た。私
達にとつてもインド隊の早い成功
は都合が良い。早く登って、早く
B・Cを離れてくれれば、私達は
自由に登山が出来る。この時点で
はまさかインド隊が事故を起こし
たり、登頂を断念するとは夢想だ
に出来なかつた。宮崎は数日前か
ら高熱が出て不調である。順次高
所キャンプ入りをする。アイスフ
ォールの中はすごい崩壊が起り、
シルバはルートの変更作業をす
る。人間がその時に誰も居合わせ
なかつたのは幸運であつた。崩壊
と思つても良い気持はしない。
エベレスト登山の最難所、最危険
地帯である。

C1直下、C2への荷上げ途
中での撮影をして順応を図る。十
月七日、インド隊の七名がアタッ
クを行う。朝四時にサウスコルを
出発するが、深雪のためとかで南
峰へ着いたのは午後二時過ぎにな
る。午後四時のB・Cとの交信で
トの外に出て出迎えた。出来るこ
とはこの位であつたから。

その後、我が隊の荷上げ隊がサ
ウスコルに行くと、テントはボロ
ボロに裂け、酸素ボンベ、ザック
その他の装備が広範囲に散乱し、
三人の遺体のみが裂風吹き荒ぶテ
ントの外に凍って転がっていた。
ルートの外に凍って転がっていた。
最後の一人の遺体は見つからなか
つた。本当に死んでいたのか?あ
るいは本当に固定したのか?

隊員三名が新たに本国から補充
された。やり方がまさに軍隊その
ものである。戦死者が出れば人員
を前線に補給する。翌朝、インド
隊は全員B・Cへ下つて行った。
私達はC・3への荷上げを行い、
十月十八日のアタックに向けての
態勢作りを急ぐ。

弱気になったインド隊からサウ
スコルに置き去りにしてある三遺
体の処理を依頼される。中国側
かウェスタンチーム側かどちらに
落とすのか?と聞くと、「とにかく
ルルート上に見えなければ良い」
という。それならば何とか日本隊
を先に登頂させてくれと交渉する
ことにし、宮崎がB・Cへ下る。
微妙な交渉はトランシーバーでは
無理である。

結局、今後の方針を聞きながら、
インド隊をたてるかたちで「日印
合同アタック」を申し入れると、
渡りに舟とはかりに合意して来た
が、日程を延ばしてくれ、と云う。
それを拒否し、十月十八日に決行
したい、と返事をするとOKとな
る。インドのアタック隊員三人が
翌日C・1を飛ばして直接C・2
へ入ることになる。ところが、ア
タック隊三人がB・Cを出た後で、
以前けがで交代した前隊長がヘリ
コプターで再度B・C入りし、ま
たまた隊長交代となり、隊長は更
迭されて本国へ召還されてしまふ。
合同アタックの話も白紙撤回され
是が非でもインド隊が日本隊より
先に登頂をする、と通告されてし
まった。止むを得ない。この日C
・3入りした私達はあくる日また
C・2へ戻る。この日から猛烈な
悪天となり、インド隊はまたまた
全員がB・Cへ撤退するといふ。
体勢を建て直すにはまた数日を要
するであろう。私達もムダな日々
を高所で過ごす訳にも行かない。
隊長

に最後のスケジュールを聞きに行
くと、「南西麓ルートは断念し、最
強パーティーで十月二十五日に第
一次アタック、その一二日後に第
二次隊を出す」と云う。私達も
そんなには待てない。強風や寒気
の子想される十一月にはもつれこ
みたくない。第一次隊が登頂出来
れば、第二次隊は日本隊も同時
にアタックして良い、という約束
をやつと取りつける。ともかく休
養しよう。ついでに予定の変更が
たびたびあるが、こういった決定
の最終は誰がするのか?と聞いた
私達への返事は「全てデリーであ
る」といふ。つまりインドのデリ
にある陸軍本部が決定を下し、
現場にいる隊長に決定権が無い。
もつともB・Cとネパール観光省
においてある無線機でカトマンズ
にいる通信員との間で一日数回の
時交信が行われているのであるか
ら、本日の軍本部にお伺いをたて
たり、本部の意向をほぼ直接的
に伝えることも可能である。やは
り「軍隊」そのものであつた。

数日後、私達はインド隊の日程
の遅れを見がしてB・Cを出発す
る。それでも結局C・2で三日間
待たされることになるのである。

十月二十七日、C3入り。今日
アタックするはずのインド隊はC
・5への荷上げだけだと云う。も
う待てない。こうなればインド隊
が登れなくても三〇日にはアタッ
クを執行することにする。最悪の
場合、隊長である私の「五年間入
国禁止」程度の処分は食らうかも





知らないが、少しでも確実に登頂し、頂上での映画撮影を行うには仕方がない。まだ登ったことの無いカラコルムの山でも登って入れ。途中、下るインド隊のシェールバとすれ違い、コルの上からも隊員二名(アタック隊)が下って来て、私達のテントの横を通って下り、行ってしまった。今夜は満月、翌二十九日、シェールバ二名が不調を訴え、下りたいと云う。昨夜は酸素を吸って眠ったというのに、居なくてはならない。村上と二人で遺体を落す。

アタックの方法は撮影班、八木原、村上が植村、松浦氏役になり、行ってしまった。今夜は満月、翌二十九日、シェールバ二名が不調を訴え、下りたいと云う。昨夜は酸素を吸って眠ったというのに、居なくてはならない。村上と二人で遺体を落す。

奇組は明日の登頂がかなり難しくなった。仕方ない。やれるだけやるしかないと思覚を決める。宮崎との交信で、昨夜、インド隊は登頂断念を決定し、私達の登頂を許可した。その代り、コルにあるインド隊の三人の遺体をウェスタン・クーム側へ落としてくれと依頼して来たという。

どうせ今日はサウスコルに一日居なくてはならない。村上と二人で遺体を落す。下からは一体は落ちて、丁度うまい具合にクレバスへ入ったという。スキ一の三浦雄一郎氏が落ちそうになり、直前に止まったあのクレバスである。二体はジュネバ・スパーの途中の岩場あたりに止まってしまったらしく届かないという。しかし、これ以上面倒も見切れない。八名がC4入りして来てにぎやかになった。隊員九人、シェールバ二人の総勢十一人が一挙にアタックすることになる。

荷上げておいた食糧カートン一ヶが強風に飛ばされたらしく無い。インド隊の残りをひろったり、シェールバのツアンパで夕食を済ませ、夜中の出発に備えて休むことにする。ところが酸素器具がまたもや一ヶ故障する。焦った。修理を試みるが直らない。誰か一人が登頂をあきらめなくてはならない。この期に及んでである。無酸素登頂を標榜するならともかく、またそれは誰にでも出来る訳ではない。悩み、迷うが、隊長の私は決断出来る。

宮崎は暗に「阿久津を止めさせろ」とトランシーバーで云って来るが、カメラマンであり、年令の割に頑張っている彼を切る決心がつかない。とうとう村上が「私は一度登っていますから」と辞退を申し出た。頂上を目前にして、ここに立ちたくない者がいるはずがない。村上は一九八三年の冬に一度登っている。申し訳ないがそうしてもうことにする。私が若い彼等と同じスピードで登れるとは見えない。代役も三枝、佐藤と交代する。三十日午前一時半、月は大きく頭上に冷たく輝いている。風の名所のサウスコルにしては無風とも云える程度の上天気。無酸素登頂を試みる山田とサターのアンリタ(過去エベレストを回無酸素登頂以外に背中に三本の酸素ボンベを背負う。五kgもある映画用カメラはもう一人のシェールバが持った。フィルムは数人が分担する。薄明りの雪の斜面をヘッドランプをつけて登り出す。空身で登る山田は無酸素のために手の冷たさを早くも訴える。ビッケルの頭に羽毛ミントンの手をたたきつけて血行を促がしている私は先頭の山田について行きさえすれば登頂出来るだろう、と離れないように登ることだけを考えて登る。東南稜へダイレクトに突き上げる急な雪面に入る。雪は程良硬さでビツチはまあまあである。名塚、三枝、佐藤が追いつき先に登る。山田は前回の登頂ペースとくらべて、十分登頂可能である云う。ホッと来た。

ともに急な雪壁を登り切り東南稜上に出る。南峰の基部である。C・2の宮崎と交信すると奇藤とカメラを背負ったシェールバの酸素器具がまたもや不調になり、喉の痛がサターと共に途中から下ってしまつたという。これで頂上での撮影は不可能になった。こうなればただ登るだけである。無用の長物となったフィルムはザツから出す。使った酸素ボンベを取り替えてデポレ新しいボンベ一本だけを背負い、軽くして再び頂上を目指す。南峰の登りと下りが今日の最難関。名塚を先頭に登る。酸素は毎分二とを三ににした。雪は足がもぐりようになるが気であつた。左側が雪庇みたに見えたので右へ寄るが、ますます悪くなる。頂上方面を見ると、とても登れそうにない。山田が追いつくのを待つて聞くと、やはり左の尾根に出てしまふという。広くやさしい尾根があり、すぐが南峰であつた。

しかし、このまま頂上まで行くと、早い時間に無事帰れるだろうか?と不安がかすかに頭の片隅をよぎった。頂上までの位かかるだろうか?宮崎と話すヒラリー・ステップは目前の段々に重なる岩場の右側だ。それさえ越せば三〇分もかからないという。名塚が急で軟かく、小さな雪稜になつてヒラリー・ステップを登り、ロープを固定したアイスバールの頭を足で押さえている。刻も早く安全圏にたどり着きたいが下りは難かしく危険である。注意な一歩がそのまま死につながる。南峰の下りには少し短かいがロープを固定して下る。足りない分は雪壁側を向き、ビッケルを差し、歯を跳込んで一歩一歩慎重に下る。私は自分で自分の登山技術に信じていないのであるから当然である。酸素をデポした場所から少し東南稜をたどり、急な雪壁を避けて下ることにする。まだ気は抜けない。少しは緩くなった斜面を下る途中で酸素が切れた。しかし危険は減った。目が見えなくなり、遅れている阿久津を迎えに向う村上と会う。午後二時にサウスコルのC4にたどり着く。助かった。生きて帰れる。仰き見るのと佐藤が登りに使った急斜面をそのままだ下っている。落ちなければ良いが、心配になる。外の三人の姿は見えない。

山田が近づき、名塚の姿も見え、あとは無事下ることに全精力を傾けよう。折角登頂しても下りに死んだりしては何んにもならない。頂上からの帰りの事故は多い。宮崎は「急げ、早く降りろ」と盛んに云って来る。四〇分の滞在の後、三人は頂上をあとにする。三枝、佐藤、阿久津とヒラリー・ステップの上ですれ違ふ。C4を遅れて出た木本はさらに下、南峰のすぐこちら側で会う。サンクラスは酸素マスクから漏れる息が凍り付き、曇つて前が見えない。いつそのこと外してしまおうかと思うが雪音がこわくてそれも出来ない。すき間から見下ろす。高所への長居は無用である。一刻も早く安全圏にたどり着きたいが下りは難かしく危険である。注意な一歩がそのまま死につながる。南峰の下りには少し短かいがロープを固定して下る。足りない分は雪壁側を向き、ビッケルを差し、歯を跳込んで一歩一歩慎重に下る。私は自分で自分の登山技術に信じていないのであるから当然である。酸素をデポした場所から少し東南稜をたどり、急な雪壁を避けて下ることにする。まだ気は抜けない。少しは緩くなった斜面を下る途中で酸素が切れた。しかし危険は減った。目が見えなくなり、遅れている阿久津を迎えに向う村上と会う。午後二時にサウスコルのC4にたどり着く。助かった。生きて帰れる。仰き見るのと佐藤が登りに使った急斜面をそのままだ下っている。落ちなければ良いが、心配になる。外の三人の姿は見えない。

奇藤からお茶をもらい、名塚の到着を待ち、あとは村上に頼むことにして四人で下り始める。出来れば今日中に宮崎の待つC2まで下りたい。目出帽を外してしまい、羽毛服のフードだけで下ると強い風がウエスタン・クーム側から吹き上げ、耳が痛い。身体がだんだん云うことをきかなくなる。固定ロープ一本分を休まずに下るのも辛い。無酸素登頂を果たした山田もしよつちゅう、しゃがみこんで休んでいる。安全は固定ロープにより確保されてもスピードは出ない。小林の待つC3に着く。名塚はC2まで下ろうと云うが、私はもう下りたくない。結局皆泊る。(以下次号へ)



群馬、栃木の分水嶺をなす山稜は、関東以北の最高峰である日光白根山から錫ヶ岳、皇海山と高度を下げつつ、南へのびて勢多郡東村の北端で東に折れて徐々に渡良瀬川へ向って下っていく。

この折曲がり点に位置する原生林の山々が袈裟丸連峰で、前袈裟丸山、後袈裟丸山、奥袈裟丸山、小丸山などがある。いついっても静かな山で、春は新緑、ツツジ、秋は紅葉と登山者を楽しませてくれる。また、カモシカ、猿等の野生動物の宝庫でもある。

登山コースは、主として次の三コースがある。

最も一般的なコースは、沢入から塔ノ沢を経て、県界尾根に出て山頂に出るコースである。最も長いコースは、足尾銀山平から六林班峠を経由して、主稜線を南下するコースで、主として次の三コースがある。

途中車道分岐には、小中登山口あるいは、袈裟丸山登山口の標識がある。足越部落、大滝トンネル、大滝分岐と行くが高原状になり袈裟丸山登山口に着く。

峠を経由して、主稜線を南下する

かくされた山 ⑬

袈裟丸山

太田山岳会

ジャマにならない所に車をとめる。小中橋から登山口までは、約12キロメートルである。

あり、昔は信仰登山の盛んな山であつた事がしのばれる。右手は所々急な斜面となり、左手は沢が近くなる。1482メートルのピークをすぎると、こめつがの林の中に石楠花の群落が現われる。

1700メートル付近から急な登りとなり、右手の前袈裟丸山を見ながら尾根の合流する地点を右折すると、後袈裟丸山の山頂に着く。山頂はせまく見晴しがきかないが、深山の印象を与える。

時間に余裕があれば、前袈裟丸山や奥袈裟丸山を往復するのもおもしろい。前袈裟丸山までは往復約1時間、鞍部が若干悪く、注意を要するが、登りがいのある山である。奥袈裟丸山までは、往復約40分である。チョコンと立っていて仲々深い山である。帰路は後袈裟丸山からそのまま往路を下って車道に出る。



事務連絡

岳連会費の未納団体について、現在、総額三万四千円が未納となっています。岳連の予算は未納を含めて計画されているため、六一年度予算では検討の必要がある。

○岳連会費未納団体 (三月現在)

群馬大学山岳部	五五年度
月夜野山岳会	"
群馬カモシカ山岳会	"
館林山岳会	五八年度
中之条山岳会	"
群馬青空山岳会	五九年度
東邦亜鉛山岳部	六〇年度

国体関東地区予選大会の資金調達を目的として、加盟団体にお願した、Tシャツの販売について

○未納団体 (三月現在)

安中山の会	二十着
館林山岳会	二十着
水上山岳会	四十着

○第四〇回国体関東地区大会決算報告

前回報告した決算報告を整理して正式報告をする。

○第一三回高体連リーガー講習会

三月二六日(水)二九日(土)四日間にて尾瀬富士見峠周辺で開催することになり、岳連より講師として田中理事長、女屋等志、山田昇、三名の参加が決定される。

参加校二四校。参加生徒男子九一名、女子四六名、顧問教師四〇名の参加予定。講習は雪上生活技術が主体となる。

太田山岳会紹介

登山口よりすぐに急な登りになり、林の中を20分位登ると稜線に着く。稜線から袈裟丸山に向かい、1415メートルのピークまでは、カラマツ林や白樺のはえている広々とした笹尾根を行く。

西方には、黒松山をはじめとする赤城山が望まれ、北方には、前袈裟丸山、後袈裟丸山が手に取るように見える。

1415メートルの広いピークからさらに笹原の中を進む。この辺の右側には伐採が進んでおり、根本山などの足尾山地の見はらしがよい。

小さなピークを数カ所登り下りしながら進むと、脛根根に石祠が52年頃までで、小教精鋭主義を

かかげ主たる行動範囲を北アルプス、南アルプスにも抜け岩登りをできる事を前提にして企画している主体として、活動した期間である。この期間には足尾松木沢の新ルート開拓に意欲をもやした。

第3期は、その後現在に至るまでの期間で、会員の年齢層の拡大、登山に対する考え方の多様化などに伴って、組織としての登山活動そのものが多様化してしまつた期間である。

当然のことながら行事計画もオリジナルなものである。安全登山を実践するための基礎技術講習会を欠かさず実施している。

月例山行は、その季節に応じた

現在の会員数は、現役約20名、OB会約20名である。今後の課題として、地域社会とのつながり、登山活動の方向づけをどうするかなどを検討中である。

会務所

太田市金山町二六一四

連絡先

太田市熊野町二七一四

沢口隆明

会長 富山 真

行事報告

技術講習会

雪上生活技術講習会が、去る三月二日谷川岳天神平に於いて行なわれました。晴天にめぐまれ参加者は十六名でしたが、白毛門笠が岳、朝日岳等が冬の勇姿を思いのま、見せてくれました。

参加者は十六名と少なかったが、伊グルーや、雪洞についての作り方、これを利用しての生活の長所短所等の生活技術を、一人一人が習得したと思います。この日

は、バス一台で早朝より天神平から山スキーで山頂まで、というグループが列を作って登っていました。このパーティーは朝六時より行動を開始し、山頂には十一時頃登ったようです。我々も、五人一組でイグルーの製作に入り、約一時間二十分ほどで、十人を入れる大きな物が出来ました。道具があればもっと早く出来る事と思いますが……。

各、山岳会の参加者が多ければ、もっともといろいろな技術講習が出来るとは思いますが、今後は多くの会員の参加をお願い致します。

(文責・竹山)



春の遭難救助訓練

三月九日、春の遭難救助訓練が上州武尊山、剣が峰の山頂直下で行なわれました。前日の夜、川場村関宅に集合した隊員達は、雪上満天の星で、朝のハレすい星を車で二年後にスキー場の出来る観測小屋へと向った。途中、雪上車朝の五時に起床した人は、小屋が倒れるのではないかと思われるの外でしばらく星空をながめてい

たようである。眠い目をこすりながら皆、起きて朝食の準備をし、熱い味噌汁で、思いつく食事を済ませ、雪上車に乗り込む。今日は、雪でなく雲一つない晴天である。八時前に剣が峰直下に着いたが、谷川岳から笠が岳、朝日岳、そして養機山の山塊が朝日を受けてピンク色にかがやいていた。各隊員達は、しばらくの間、この景色に見とれていたようである。やがて新井副隊長の号令で、隊員達は思い思いの持ち場に散り、剣が峰の山頂より二〇〇米の、ワイヤーロープがセットされた。

西山隊長以下、第二陣の人達が到着し、本格的に行動が開始された。今回は、NHKと毎日新聞の佐藤氏も同行し、にぎやかな救助訓練となった。訓練は十二時半に終了し、山スキーで下る人は、西山隊長以下八名であったが、雪の斜面を転びながら十四時二〇分には下山し、一日の訓練を終了した。

(文責・竹山)

理事会報告

期日 昭和六一年二月二日(水)
一九時、所、体協会館
参加者 田中・女屋・水野・羽野
竹山・須田・樺田・富山・吉田
笠原・川辺・西人
部会報告
○総務部 昭和六一年度のスポーツ安全保険が値上げの方向で検討されている。国体強化選手及び岳連救別隊の予算に関係するのて今内から準備をお願いし

たい。
三月五日に群馬県教育委員会主催の競技力向上指導者講習会で、山田昇氏が講演することが決定した。

救助隊のトランシーバー二台の更新について更新料二万円を準備費から支出した。
二月一日の中島副会長叙勲祝賀会には、会の皆さんには大変お世話になりました。有難うございました。八七名が出席。
群馬県スポーツ表彰に沼田山岳会、山田昇の受賞が決定。受賞式は二月三日(木)県庁。

群馬県山岳協会の桑原体育館に沼田山岳会山田昇、県体育協会長賞に個人の部で八木原昭明(ミヤマ)、名塚秀二(前橋)、三枝照雄(沼田)、佐藤光由(ミヤマ)。団体の部で桐生山岳会女子インディビジュアルメント、サ登山隊(森下、木村、下田、小林)の受賞が決定。受賞式は二月二六日総合体育センター。
○編集部 嶺二八号を発行した。次に発

行で準備中、二ページ増となる。○国体部 県予選を四月二六日・二七日榛名山で開催するので、各会より選手を出してほしい。
山梨国体の内容について説明
○自然保護部 昨年問題とされた、朝日岳の保護について岳連と協力したい。
○群馬の山岳委員会 三月五日、コース紹介を担当する加盟国体の関係者に集まってもらい分担が決定された。



○国体部 山梨国体縦走審判員に高体連の斉藤正之氏を推薦したい。
第四〇回国体関東地区大会決算報告
○遭対部 三月九日武尊山にて冬期救助訓練を行う。六一年度救助隊員の募集を行なう。
○指導部 二月一日に吾妻溪谷で氷壁技術講習会を行った。三月二日に積雪期雪上生活技術講習会を天神平で行う予定。
○群馬の山岳委員会 事業費として、二〇〇万円の子算の使用が承認された。

○指導委員会 指導員資格の更新は三月二十日までに竹山まで申し込むこと。
三月二日、雪上生活技術講習会を谷川天神平で開催(別項参照)識が欠除してのことなど、しかし根本的には、経験にもとずくときすまされた動物的な勘に勝るものなし。

今回は従来になかった新しい企画として、八木原さんに原稿を依頼し、ルポルタージュ風な読み物をのせ、二ページの増ページとした。八木原流の記録は大変ユニークで、感動的な文章が盛り沢山で、全国でもトップレベルにある。本県岳人の活動のあとがかがわかる。他の記事と合わせて、ていねいに読んでくださることが、編集部の切なる願いです。
春山の季節を迎え、冬眠していた人達も動き出すことになるでしょうが、最近の事故のなかには初歩的なミスにもとずく事故が多いように思う。道具は良くなったが使いこなす技術、また科学的といながら、はかり知れない、自然条件の諸々の変化に対応出来る知識が欠除してのことなど、しかし根本的には、経験にもとずくときすまされた動物的な勘に勝るものなし。

編集後記